

「コンナイ」のように、それらは動詞「見る」を落して、代名詞に「なさる」類の尊敬助動詞が直接続いた形をとっている。(4)では、人や家を主語部にたてた時の、「コレニヤー」・「アナタニヤー」などの「くには」待遇について考えてみたい。

視点3の「言いまわしによる待遇表現法」の考察には、挨拶文・依頼文・勧誘文・命令文・禁止文・否定文などを取上げる。これらには、婉曲表現・謙讓表現・古雅表現、等々の工夫がこらされるのが常である。たとえば長門市青海島の通(カヨイ)集落の、「オンマイタシマス(「オンマモーシマス。」と教示した人もあった。)」という挨拶も、一種の古雅表現と言えよう。これは葬式の返礼や法事の案内に他家を訪れた人が、羽織袴に威儀を正して述べることばである。「おん前致します(おん前申します。)」であろうと言う。若い人々はもはや口にしなくなつたとはいへ、挨拶ことばには、このような古雅表現も長い生命を有している。

この小報告では、第三の視点のうちの、「述語部における尊敬表現法」を取上げた。

冒頭の簡略図に①～④の番号を記しているが、これは待遇表現法の観点から、山口県の日本海沿岸島嶼域を試みに四分したものである。なお、以下の記述の中で、方言文例をあげてその地点名を記す時は、この番号を用いて、「①江崎」のように略記した。

- ① 江崎 阿武郡田万川町江崎(アブゲン タマガワチョー エサキ)
- ② 須佐 阿武郡須佐町(アブゲン スサチョー)
- ③ 見島 萩市見島(ハギシ ミシマ)
- ④ 相島 萩市相島(ハギシ アイシマ)
- ⑤ 大島 萩市大島(ハギシ オーシマ)
- ⑥ 通 長門市青海島通(ナガトシ オーシシマ カヨイ)

- ① 青海 長門市青海島青海(ナガトシ オーシシマ オーミ)
 - ② 湊 長門市湊(ナガトシ ミナト)
 - ③ 粟野 豊浦郡豊北町粟野(トヨウラゲン ホーホクチョー アワノ)
 - ④ 阿川 豊浦郡豊北町阿川(トヨウラゲン ホーホクチョー アガワ)
- この地点の三文例は、梅光女学院大学日本文学科第六回生中村真智子姉の教示による。

- ③ 肥中 豊浦郡豊北町神田肥中(トヨウラゲン ホーホクチョー カンダ ヒシュー)
- ③ 二見 豊浦郡豊北町北宇賀二見(トヨウラゲン ホーホクチョー キタウカ フタミ)
- ③ 湯玉 豊浦郡豊浦町宇賀湯玉(トヨウラゲン トヨウラチョー ウカ ユタマ)
- ③ 川棚 豊浦郡豊浦町川棚(トヨウラゲン トヨウラチョー カワタナ)
- ③ 室津 豊浦郡豊浦町室津下(トヨウラゲン トヨウラチョー ムロツシモ)
- ③ 黒井 豊浦郡豊浦町黒井(トヨウラゲン トヨウラチョー クロイ)
- ③ 吉見 下関市吉見(シモノセキシ ヨシミ)
- ③ 吉見 下関市吉見(シモノセキシ ヨシモ)
- ③ 蓋井島 下関市蓋井島(シモノセキシ フタオイジマ)
- ③ 安岡 下関市安岡(シモノセキシ ヤスオカ)
- ④ 彦島 下関市彦島(シモノセキシ ヒコシマ)
- ④ 竹の子島 下関市彦島竹の子島(シモノセキシ ヒコシマ タケノコジマ)

述語部における尊敬表現法

諸語部の待遇表現法を比較する時、述語部のそれはもつとも多様である。それはいわゆる「尊敬(直接尊敬)」・「謙讓(間接尊敬)」・「丁寧」に三大別され、この三者がまたさまざまの言いかたを有している。これらの中で、尊敬表現法の内奥は特に多様である。当域

の尊敬表現法としては、左の五項が取上げられる。

- 1 尊敬動詞の使用
- 2 尊敬助動詞の累加
- 3 「オ……マス」尊敬法
- 4 「……テ」尊敬法
- 5 連用形による勸奨・制止法

ところで、これらの待遇表現法を用いる時、話者は常に尊敬意識をもつて、対者・他者を遇しているとはかぎらない。たとえば、「ゴロージマセ」のような、待遇品位の高い動詞を用いている時の待遇心意は、「うやまい」・「あらたまり」・「へだて」等々、さまざまである。また、「ユータヤッタ」・「イキーネ」などの日常敬語の使用は、女性のばあいはむしろこれが普通待遇であつて、「ユータ」・「イケ」は卑罵待遇である。

このような事情に省みる時、「尊敬」の名を用いることがためらわれる。しかし、さまざまの待遇心意をすべて表わし得る用語を創出しかねて、今は、代表的な一待遇心意の名を、全体の名とすることに従う。

1 尊敬動詞の使用

当域の尊敬動詞のおもなものは、「ゴザル」・「ジャール」・「オイデル」(三語は「居る」「来る」「行く」の尊敬語)・「オンラレル(おつしやる)」・「ゴロージマス(ご覧になる)」・「アガル(召上る)」・「ツカサル(下さる)」等々である。(これらの中には、豊浦郡以南では用いられていない語もある。)また島根

県ざかいでは、「オレル(居られる)」・「イケタ(行かれた)」などの下一段尊敬動詞も用いている。この項では、「ゴザル」・「ジャール」・「オイデル」と、下一段尊敬動詞とを取上げた。

(1) ゴザル

「ゴザル」は、今日、当域ではほとんど用いられていない。筆者の調査では、九十才の老女と八十五才の老男とから、わずかに次の二例を得ている。

オヤサマガ ミテ ゴザル シツテ ゴザル。 仏様が人間の
することをすべて見ておられる、知っておられる。(老女 ②
青海)

。ジュニタイガ ゴザツタゲナ イノ。 十二体の仏様がおられた
そうですよ、ねえ。(老男 ②相島)

二例ともに神仏関係の敬語である。このほか、沿岸域では萩市山田の古老が、「若いころに聞いていた。」と語った。この老男の祖母は、祭の客人を、「ヨゴダツタノ。」と迎えたという。「ゴザル」は、親愛の情のこもった軽い敬語であつたようである。青海島の通では、「ゴザレ」・「ゴザイ」の用例も示された。

また萩市山田の老男は、「ヨゴダンサエタノ。」をも記憶していた。「ゴダンサエエル」は、「ゴダル」に尊敬助動詞「サエエル」を添えて、待遇品位を高めている。青海島の通・青海、その他大津郡の諸地点では、「ゴッサエタ」・「ゴッサレイ」・「ゴザサイ」・「ゴッサイ」・「ゴッサエイ」と言ったことがある。

山陰から九州北西域にかけては、出雲地方と九州の筑前域とに、今日も「ゴザル」ことがよく行われている。両域の間の長門日本海がわの「ゴザル」が、以上のような痕跡状況であることは、山陽道からの言語新化の影響が、この地域に比較的早く及んだためであろうか。

(2) ジャル・ジャール

「ジャル」は「おじやる」が接頭辞「オ」を落した語形である。相島では、次の文例に見られるように、終止形・命令形は長呼形、連用形は短呼形である。

。コレノ ジーチャン ジャール カノ。 ここのおじいさんは居られるかねえ。(老女の訪問辞)

。ヨメジョガ シュートバーニ ノ、コッチ ジャーレツ テ。

嫁が姑に「こっちにおいで」と言う。(老男↓筆者)

。アシコニヤ オキヤクガ ジャッタ。 あの家にはお客が来られた。(老女↓筆者)

「ジャール」は「居る」・「来る」の尊敬語で、「行く」の尊敬語の用法は見られない。その待遇品位は「ゴザル」よりはやや低いようである。五十代以上の人々は男女ともに用いているが、使用頻度はさして高くない。萩市山田では、九十才に近い老男が、隣室の妻に「コッチー ジャール ノ(こっちへおいでよ)。」と声をかけるのを、昭和四十四年に聞いている。また青海島青海の九十才の老女からは、昭和五十一年に、「ソコニ ジャラーデモ コッチー ジャレーノ。」とか、「コンダ ウチー ジャレヤー。」と、以

前は言っていたと聞いた。通集落では「ジャイノ(おいでよ)。」の教示もあった。

(3) オイデル

。アソコニモ オイデル ネ。 お年寄があそこにもおられるね。(老女↓筆者 ①江崎)

。アンター アシコ オイデタホジャ ナイ ワノ。 あなたはあそこに行かれたんじゃないわねえ。(老女↓筆者 ②見島)
。コッチ オイデー ナ。 こっちにいらっしやい。(中女↓中女 ③吉見里町)

「オイデル」は、「居る」・「来る」・「行く」の尊敬語として全域の中年以上の男女によく用いられている。待遇品位は中程度で対者敬語としては、通常、同年者のおこなわれる。青少年は、女子が命令表現に用いる以外は、ほとんど使用しない。「オイデル」の待遇品位をより高くするためには、「オイデマス」・「オイデラレタ」・「オイデテ カネ」のように、助動詞「ラレル」・「マス」や、助詞「テ」を添えて言う。そのうち、「オイデマス」はもっともさかんで、もはや一語に熟していると言える

(4) オイデマス

「オイデマス」も全域でさかんであるが、青少年者には用いない。オイデマシヨ。ヨ。ヒルワ。家にいらっしやるでしょうよ。昼間は。(老女↓筆者 ②見島)

。ドコ オイデマス。 どこへお出かけですか。(老男↓老女

①江崎

。アナター ナン ヒーサニ オイデマスルンデシヨールカ。
 あなたはあのお長く滞在なさるのでしようか。(老女↓筆者
 ①江崎)

。ミー オイデマセ。 見にいらいっしやいませ。(老女↓筆者
 別表I ゴザル・ジャール・オイデルの存立状況

③吉見妙寺

終止形・連体形は、通常「オイデマス」であるが、ごく稀に古老
 から「オイデマスル」を聞く。仮定形「オイデマスリヤ」・「オイ
 デマシヤール」の使用頻度はきわめて低い。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形	待遇品位	分	布	域
ゴザル		ゴザツた (ゴダツた)	ゴザル			(ゴザレ) (ゴザイ)	中	②萩市山田 ③相島 ②青海島の通・青海		
ゴザンサレル		(ゴダンサエエた) (ゴツサエエた)				ゴツサレイ ゴザサイ ゴツサイ ゴツサエイ	中の上	②萩市山田 (「ゴダンサエエた」のみ) ②青海・通 「ゴダンサエエた」以外 ②黄波戸 (の活用形		
ジャール	(ジャラーでも)	ジャツた	ジャール			ジャレ ジャイ ジャール	中	②萩市山田 ③相島 ②青海島		
オイデル	オイデン	オイデた	オイデル	オイデル	オイデリヤール	オイデ オイデー	中			全
オイデマス	オイデマセン オイデマシヨール	オイデマシた	オイデマス	オイデマス オイデマスル	オオデマシヤール オイデマスリヤ	オイデマセ	上			全

- 1、基本形は、使用されている活用形から推定したものである。
- 2、() づきの活用形は、「今は使わないが、以前に使っていた。」などの説明のあったものである。
- 3、分布欄に「〇〇域」と記さず、地点名をあげているのは、調査地点が少ないため、今はまだ域を言うことを控えているものである。

用いることが多い。その使用は、当域では、田万川町・須佐町など、北部域に限られているようである。

2 尊敬助動詞の累加

尊敬助動詞を累加して待遇品位を高める敬意表現法は、尊敬助動詞を用いるよりも、一段と優勢である。当域で用いられている尊敬助動詞は、「ヤル」・「ヤール」・「ナサレル」・「ナサル」類、「レル」・「ラレル」である。別表Ⅱに、これらの存立概況を記した。

(1) ヤル・ヤール

方言助動詞「ヤル」について、藤原与一先生は次のように説かれ、その全国的な使用状況を示しておられる。

「ヤル」はもともと、「オ詠ミアル」などの「オ……アル」の言いかたからできた。(筆者中略)

待遇意識の新たな展開が、文法形式の新しい結果をもたらし、かつこの、やや軽い敬意表現法を確立し得たのもある。

『日本語方言文法の世界』二三七頁)

当域でも、③黒井で「オイヤル(居られる)」を、②相島で「オネヤツタ(寝られた)」を、それごとく一回聞いただけで、接頭辞「オ」を併わない形が一般である。

。ジーチャン コマリヤール。 じいちゃんが困られる。(老)

女↓老女 ②大島)

。アノマヤー イキヤールン。 あの人は行かれない。(老)

女↓青女 ③阿川)

山口県日本海沿岸島嶼域の方言の待遇表現法 — 述話部における尊敬表現法 —

。ココデ ハナシヤツタケド、イマ アッチー イキヤツタロ
ー。 おばあさんはここで話されたけど、今あっちに行かれた
だろう。(中女↓中女 ②相島)

。ハッキリ イーヤーリヤ エーセーナ。 はつきり言われ
ばいいのにね。(老女↓青女 ③阿川)

。センセー ナンテ イーヤータ カ。 先生は何て言われた
か。(老女↓青女 ③阿川)

。コッチー キヤール。 こっちにおいで。(中男↓中男 ①
江崎)

。タバコ イツポン クリヤールイノ。 たばこを一本おくれよ
ね。(中男↓中男 ③吉見西町)

。アンバセルケ キヤレ。 遊ばせるからおいで。(老女↓小男
③二見)

。ワサオジカタ イツテ ツルドーニ イトヤイ。 わさおじ(屋号)の家に行つて鶴藏さんに言いなさいよ。(老女↓小女
③見島)

。アッチー イキヤイノ。 あっちに行きなさいな。(老女↓
小女 ③通)

。オーチモ ハイリヤールノ。 お前さんもお入りよ。(老女↓
老女 ③室津下)

ここには全活用形をあげているが、命令形、ついで連用形(「ヤ
ツた」の形で)がよくおこなわれており、仮定形があらわれること
は稀である。

「ヤル」は、沿岸域では、下関市南部を除いてほぼ全域の、主として漁業集落に用いられている。使用者は老年男女、および中年男子に限られていて、次第に衰退していく様相を見せている。農村でも稀に「ヤル」を聞くことがあるが、土地人は「浦ことば」だと意識している。一方、島嶼域では、相島・大島・青海島で、主として老年層に用いられているが、最北端の見島ではほとんど聞けない。

(筆者の数回の調査では、先にあげた一例を得ているのみである。) また助動詞「ナル」の栄えている角島・蓋井島・六連島・竹の子島・彦島では、「ヤル」をほとんど用いない。蓋井島の古老のことばに、一・二度聞いたばかりである。

「ヤル」に託される敬意はごく軽い。一般には、同輩以下の者に、ちよつとことばをやらせて言う^くといった程度のものである。青海の一老女は、「他人には言わない。メイコ・オイコ(姪・甥)に言うことば」だとも言った。「ヤル」をきたないことばと意識している人々も多い。もっとも、「ヤル」ことばの比較的さかんな相島・大島の「ヤル」は、他の地点にくらべて、やや品位が高

い。

ところで、当域の「ヤル」の語形はかなり多様である。別表に記しているように、基本的には長呼形であるが、連用形は「ヤッタ」が常である。「ヤータ」は豊浦郡北部の阿川あたりで聞くのみである。一方、命令形は、全域で長呼形・短呼形いずれをも用いている。またこの助動詞は、前接動詞の連用形が一音節のばあいは、語形変化を起さないが、二音節以上の連用形に続くと、「イキヤール(行きやる)」「ワラヤール(笑いやる)」の二種類があらわれ

る。前者は、「ヤール」の直前の母音が落ちて、その前の子音と「ヤール」とが熟合したものであり、後者は、「ヤール」の前の連母音が、後の母音を落したものである。

当域の「ヤル」の存立状況はほぼ以上のとおりである。それは、先出の動詞「ジャール」(「お出である」からと言われる)よりはかなり広い地域に、今日も用いられている。しかし、次に記す「ナサレル」・「ナサル」系助動詞のように、助動詞「マス」を重ねてさらに多くの語形を造出していくほどの発展性は見せていない。

(2) ナサレル・ナサル系助動詞

当域におこなわれている「ナサレル」・「ナサル」系助動詞は、「ンサレル」・「サレル」・「ナハル」・「ナレル」・「ナル」である。

① ンサレル

オマエ ウチー オリンサイ。お前は家に居なさいよ。(老男↓妻) (① 江崎)

島根県さかいの田万川町では、「ンサイ」が親愛の情のこもった日常敬語として栄えている。中部域・南部域では、「ンサイ」の勢力は弱い。

センセー ハー トナリー キーテ ミンサレ。先生あのお隣家に尋ねてごらんさい。(老女↓筆者) (② 大島)

見島・大島の老年者の「ンサレ」は、このように外来者向け敬語であり、あるいは挨拶ことば敬語であって、「ンサイ」よりやや敬意が高い。

連用形の使用はまれであるが、下関市吉見妙寺の老女は、「ヒワ オイリンサレカケテヨル。」と言った。余命いくばくもないとの比喩である。この地域では「ンサレ」は衰退途上にあつて、このようにおどけて用いられる程度のものになつてゐる。

② サレル

「サレル」の使用概況は別表Ⅱのとおりであるが、青少年者にも「サイ」・「サン」は聞かれる。「サイ」・「サン」は、一音節連用形に続く時は、「ミーサイ」・「シーサン」のように、長呼形に続く。「サン」は、女性語で、「サイ」よりやや品位が高い。この語は後に述べる「サンセ」の「セ」音省略のものかとも疑われるが、その待遇品位などから推して、ひとまず「サレ」・「サイ」の類と扱つた。また、地点によつては、ごく稀に終止形「サル」を用いる。これは命令形「サイ」を軸として生れた語形ではあるまいか。多くの語形を有しているのは、この助動詞が、当域でかなり古くからよくおこなわれていたためであらう。

。シーサンワ マイヒニ ドツチカ イキサレマス デ。 おじいさん(夫)は毎日どつちかの病院に行かれますよ。(老女↓筆者) (②通)

。クリサレー ナ。 下さいな。(老女↓老女) (③栗野)

老年者のことばには、このように「レ」音が聞かれることがあるが、一般には、「サエタ」・「サエル」の語形のほうがよくおこなわれている。この助動詞の待遇品位は、「ヤル」よりはやや上であ

③ ナハル

「ナハル」は、関門域の六連島・彦島・竹の子島で、老年者が用いている。集落内の人々にむけてのもてなしことばである。別表Ⅱに記したように、その活用は一段活用と四段活用との混合型である。「キオツケテ イキナハイ ナ。」のように、命令形「ナハイ」の使用頻度ももつとも高い。

④ ナレル・ナル

「ナレル」・「ナル」の二種の活用型をあげたが、ほとんどの地点で、混合型の活用がおこなわれている。全活用形にわたつて下二段型であるのは、角島ぐらいであらうか。

さきあげた「サレル」と、この「ナレル」・「ナル」とは、前者は中部域に後者は南部域にと、その分布域をほぼ分けて、同様の待遇品位で存立している。もつとも、南部域の「ナレル」・「ナル」は、中部域の「サレル」ほどに優勢でない。その中で、蓋井島では今日も「ナル」が榮えていて、次のように用いられる。

。オマイカタノ シーヤンナラ アスコ オンナイタ。 お前の家のじいさんなら、あすこに居られたよ。(老女↓中女)
。ノボルアンニヤンガ、イチチョンナットタ ヒジャ ナー カネ。 昇さんが行つておられた日じゃないの。(中女↓中女)

「ナサレル」・「ナサル」系助動詞は、このように多様であるがその待遇品位はさして高くない。あらたまった挨拶や、集落外の人々との会話の中では、「ナサレマス」・「ナサイマス」系助動詞が用いられる。

(3) ナサレマス・ナサイマス系助動詞

「ナサレマス」と「ナサイマス」とでは、前者がより古いものであるうか。「ナサイマス」系の助動詞は、全域の老・中年層におこなわれているが、「ナサレマス」系助動詞は、主として中部域の老年層に次のように用いられている。

。オカエツテ オヤスマナサレマセ。 お帰りになっておやすみなさいませ。(老女↓筆者 ②長門市湊)

。マー マー ハジメテ オイデンサレマシテ。 まあくはじめておいでになりましたのに。(老女↓筆者 ③通)

。マイヒニ ヤマエ イキサエマス デ。 あのおじいさんは、毎日山に行かれますよ。(老女↓筆者 ②青海)

別表Ⅱの「ナサンス」以下「ハンス」までの助動詞は、いずれも「ナサイマス」系であろう。これらの中の「ナサンス」・「ンサンス」・「サンス」は中部域で用いられている。

。オシマイナサンシタ カ。ハ夕方方の訪問辞 老女 ③見島▽

。キオツケテ オイキンサンセ。ハ送辞 老女 ②萩旧市内▽

。ムカシノ コトー ハナシテ キカシサンセ。テ。昔のことをこの先生に話して聞かせなさいって。(中女↓老女 ②相島)

一方、南部域には、「ナハンス」・「ナンス」・「ヤンス」・「ハンス」が、次のようにおこなわれている。

。オヨロシハンセー。ハ入家辞 老女 ④彦島▽

。オアテナンセー。座布団をお敷きなさいませ。(老女↓筆者 ③肥中)

。ゴネン オイレヤンセー ナ。お体をお大事に。(老女↓筆者)

者 ⑤湯玉)

。ドコノ ガッコエ オツトメハンス カ。どこの学校におつとめなさってますか。(老女↓筆者 ③川棚)

中部域の「ナサイマス」系助動詞は、語形を変えながらも、語中の「サ」音を失わない。一方、南部域のそれらは「サ」音をとめない。また命令形語尾が長呼されるのも、南部域の「ナサイマス」ことばの特色である。

以上の助動詞は、「サレマス」と「サンス」以外は、すべて接頭辞「オ」を冠した動詞に続き、敬意がきわめて高い。これらは集落外からの来訪者に対して用い、また、集落内の人々には、あらたまった挨拶の中で用いる。ただし、青少年者は、これらの助動詞を使用しない。

(4) レル・ラレル

「レル」・「ラレル」は全域の全年層に用いられている。中部域では「エル」・「ラエル」と発音されることも多い。この助動詞の待遇品位は、「ナサレマス」・「ナサイマス」ほどに高くない。また、「サレル」・「ナル」にこめられた親近感もない。「レル」・「ラレル」が用いられると、その敬意はさほど高くないにもかかわらず、「よそいきことば」らしくなる。今日の共通語「レル」・「ラレル」であるうか。もつとも北部域には、「レル」が四段動詞と熟化した尊敬動詞がおこなわれているので、この助動詞をすべて共通語からのものと言いきってしまうことは、危険かもしれない。今後の課題とする。

3 「オ……マス」尊敬法

。イツ オカエリマス カ。
 女↓筆者 ②萩市) 一つお帰りになりますか。(中)

。ドーン オアガリマセ。 どうぞ召上つて下さい。(老女↓筆者 ③通)

「オ+動詞連用形+マス」敬語は、中部域とその周辺域の老年者・中年者によくおこなわれている。青少年は用いない。敬意は「……ナサレマス」について高い。

4 「……テ」尊敬法

「ユーチャッタ(言われた)」などのいわゆる「テ」敬語は、日常敬語として、全域の全年層によくおこなわれている。

(1) 動詞+「テ」+指定助動詞

。オー コンニ デテジャ。 おお、おばあさんはここに出ておられる。(老男 ①江崎)

。ドネー ユーチャツツロー カイ。 どう言われただろうかね。(老女↓老女 ③安岡)

。ヒルノ ビンデ オカエツテデス カ。 昼便の船で帰られますか。(老女↓筆者 ③相島)

「テ」敬語の待遇品位は、助動詞「サエル」・「ナル」を累加したものでやや高い。「新しいことば」という土地人の教示もたびたびあった。動詞部分が尊敬語であるのは、「オカエツテ」・「オ

イデテ」に限られるようである。中部域の老・中年層はいちだんと丁寧な、「カイテデ アリマス(お書きになります)」「キヨツテデ ゴザイマス(いまこちらにむかっていらっしゃいます)」のようにも言う。

「テ」敬語の否定表現には、「〜テデ ナイ」を用いるが、稀に「テニ ナイ」を聞く。

。ウチニヤー コーテニ ナイ。 私の夫は買われない。(中女 ↓中男 ③阿川)

「ニ」は指定の助動詞相当である。ところで「テデ ナイ」よりさらにさかんにおこなわれているのは「……ン ナイ」である。

。コドモサン イッソ オツテン ナーイ。 子供さんは全然居られないの。(老女↓老男 ①須佐)

「ン ナイ」の「ン」は、「ニ ナイ」の「ニ」が母音を落したものである。述話部に榮えている「テ」尊敬法は、修飾話部にも用いられ、「センセーガ キテナラ〜」・「オユニ イッテノ トキ」の言いかたが、全域にさかんである。

(2) 「〜チャッタ」敬語

「ヨー イキヨツチャッタ(よく行かれた)」。のように言う「チャッタ」敬語が全域に榮えている。特に若い女性がよく用いる。「チャッタ」は、「チャッタ」の熟合形であろう。その敬意は「チャッタ」より幾分軽い。豊浦郡北部域では、「シチャータ」・「ユーチャータ」のように、促音を長音に変えて言うこともある。

(3) 指定の助動詞をとまわらないもの

。アノ ヒター ヨー シンボー シテー ナ。あの人はよく働かれますよ。(老女↓筆者 ③吉母)

このように指定の助動詞ぬきの述部を文末詞で統括して、軽い敬意を表現することも、全域にさかんである。中・青年層の女性は、「イツ イッテ(いつ行かれるの)」と、文末詞なしに問いかけることも多い。若い人々は好んで軽い表現につくようである。

5 連用形による勸奨・制止法

今日の日常敬語としてもっともさかんな「テ」敬語には、勸奨・制止の表現がない。これを埋める表現として、南部域には、連用形による勸奨・制止表現法が栄えている。中部域でも時折聞くことがある。

(1) 勸奨法

①「オ」+動詞連用形(十文末語部)

動詞連用形に接頭辞「オ」を冠した表現は、おもに老・中年層の女性が用いる。

。モー オイニー ナ。もうお帰りよ。(老女↓小女 ③湯玉)
。ネン オイレ ナー。お大事にね。(中女↓老女 ③吉見里)

町)

連用形述語部に続くのは、通常、ナ行文末詞であるが、ときに「ヨ」も用いられる。

。マメデ オイキ ヨー。元気でくらしなさいよ。(老女↓老女 ④彦島)

これらの文中に見えているように、文末語部の続く表現では、動詞か文末詞か、いずれかが長呼される。

。イッテ オミ。エー ドナ。いってごらん。いいよ。(老女↓老女 ③吉見西町)

これには文末語部がない。この表現も前者に劣らずさかんである。このばあい、動詞部分は通常短呼であるが、ときに長呼されることもある。これらは、「おくなさい」などの「なさる」助動詞の省略のごとく見えるが、当域の「なさる」類は、「オ」を冠した動詞には続かない。したがって、「なさる」類の省略とは考えにくい。

②「オ」+動詞連用形+打消助動詞+問いかけ文末語部

「オイキーナ」などと併用される「オイキン カナ」・「イッテ オミン カナ」などは、前者よりいちだんと柔らかな表現である。

③動詞連用形(十文末語部)

接頭辞「オ」を冠しない連用形勸奨法は、おもに若年層の女性が用いる。

。チョット アガリー ネ。ちょっとお上りよ。(小女↓小女 ③黒井)

。ミナ イッテ シマイロヤ。皆行っておしまいよ。(小女↓小女 ②見島)

このばあいも動詞部分は長呼される。これを受ける文末語部は、

南部域では「ナ」行文末詞であるが、中部域の見島では「ヤ」を用いる。文末語部を持たない「ハヨ イキー」「アッチー アガリ」などの言いかたも全域でよくおこなわれている。

④ 「リ」語尾勸奨表現

。タベリー ネ。オイシーヨ。 お上んなさいね。 おいしい

よ。(小女↓小女 ③黒井)

少女達の一段活用動詞勸奨表現では、「オキリーネ」・「タベリーネ」・「デーネ」よりも、「オキリーネ」・「タベリーネ」。「デリーネ」を用いるほうが、優勢になりつつある。文末詞を添えず、「タベリー」だけであることも多い。この表現法の創出は、「ミラン」・「デラン」などのラ行四段化傾向とも関係が深いのであろう。未然形・命令形のラ行四段化が、語幹一音節の一段動詞にのみ見られるのにくらべて、勸奨表現のばあいの「リ」語尾はるかに優勢である。勸奨表現における「リ」音尾好み々々ともいったものが感じられる。その勢力はサ変動詞にも及んで、「シリーネ(なさいよ)」とも言う。見島の小学生からは「セリーヤ」を聞いた。

(2) 制止法

。オカサン オタキンナ。 お母さんお風呂を焚きなさんな。

(中女↓老女 ⑤栗野)

。シンナ イネ。 しなさんな。(小女↓小女 ④竹の子島)

これらの制止表現は、「(「オ」) + 連用形 + 「ン」 + 禁止「ナ」の形をとっている。「ン」音は「ナ」音の前に挿入された撥音である

ろう。「オタキンナ」は「オタキルナ」が転じたとも疑えるが、当域に「オ……ル」の言いかたは聞かれない。また接頭辞「オ」を伴わない「シンナ イネ」や「イキンナ イネ」などの言いかたのさかんなことも、「ル」√「ン」ではないことを立証していようか。

以上、述語部待遇表現法を略述した。当共時態の現状は、「テ」敬語全盛期と言えよう。助動詞累加の敬語法を押えて、これが栄えていることは、当域待遇表現法の一特色である。全盛の「テ」敬語層の下には、「ナサレル」・「ナサル」層があり、さらにその下に「ヤル」層が見えていた。また一方に敬語動詞「オイデル」・「ジャール」・「ゴザル」の層があつて、これらは相寄つて、北部域・中部域・南部域で、それ／＼特色のある敬語地層を形成している。敬語地層の掘り起こしは、おのずから通時的研究を踏まえた共時的研究となる。

おわりに

述語部尊敬法の記述は、待遇表現法研究の一部分に過ぎない。この小報告記述過程での気づきを書きとめて、今後の展開を志したい。

1 方言待遇表現法は、集落社会の歴史的現実をよく映している。在のことばと浦のことばとの違いは、土地人のよく指摘するところであるが、それが顕著にあらわれるのは、待遇表現法面である。また代名詞語彙や人称接尾辞の繁簡も、集落社会の歴史的構造をよ

く映している。

2 今日、方言人の待遇表現生活は、「内と外」・「晴と曇」のわきまに支配されることが大きい。

人と家とに固定して、あるレベルの待遇語が用いられることは、今日ではきわめて稀である。日頃は軽い敬意の待遇語を交しあう人々も、慶弔の挨拶には最高敬語を使用する。一方、外来者の待遇も「オイデナサレマセ」が、いつか「イツ カエツテ ノ。」と日常敬語に変わることがある。うちとけるにつれて内輪待遇にもなるのである。

3 話題の主の尊敬待遇は、実は対者待遇であるばかりが多い。

外来者である筆者との会話では、話題の人物に関して尊敬語を続出させる人がある。ところでその人が土地人どうしの会話で同一人物をとりあげる時、尊敬語はさほどに用いられない。この現象は、話題の主に「よいことば」を使うことは、実は対者に「よいことばづかい」をしているのであろう。当域では「オジ―チャンガ ユ―チャッタ。」のように、家族を敬語で遇して対者に語るが、これもまた同様の対者敬語であらう。

4 待遇語隆替のテンポはかなり早いようである。

老年者と青少年者との敬語使用状況が著しく異なっていること、また同一敬語の待遇品位が年層により、あるいは地点によって異なっていることは、方言社会における待遇語隆替のテンポがかなり早いことを語っていかうか。

方言待遇表現法の研究が適切におこなわれるならば、方言社会のくらしの心と、生活の歴史的現実とを、正確に伝えることができるのではあるまいか。そのような待遇表現法の記述をめざしたい。

(一九七六・九・二〇)

さきに「長門市仙崎通の生活語の待遇表現法」の口頭発表を、藤原先生にお聞きいただき、ご教示をたまわりました。この稿はそれを軸として記しました。厚く御礼申し上げます。